

# 教育研究業績書

年 月 日現在

氏名 櫻木 潤

枚中 枚目

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年 月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	概 要	编者・著者 名(共著の場 合のみ記入)	該当 頁数
(著書) 木崎愛吉旧蔵本山コレク ション金石文拓本選(なに わ・大阪文化遺産学叢書 7)	共編 著	2008年3 月	関西大学なに わ・大阪文化 遺産学研究セ ンター	関西大学博物館が所蔵する本山コレク ションには、日本各地の金石文拓本が 存在する。それらの大部分は、明治 末期から大正初期に木崎愛吉が収集 したものであり、彼が編纂した『撰河 泉金石文』・『大日本金石史』・『大 坂金石史』のもととなった貴重なも のである。本書は、木崎収集の拓本 から70点を選んで、写真版と個別 解説を付した図録で、掲載拓本の選 定や本書全体の編集を行うとともに、 総論「本山コレクションと木崎愛 吉旧蔵拓本」と「高野山慈尊院道 四里石」・「日部神社石燈」・「 桜井神社(旧国神社)石燈」・「 聖武天皇造国分寺勅書銅版」につ いての個別解説を執筆した。	西本昌弘・ 松永友和	151頁
南紀寺社史料(関西大学東 西学術研究所資料集刊25)	共編 著	2008年7 月	関西大学出版 部	本書は、紀伊半島における曹洞宗の 拠点寺院のひとつ新宮宗応寺文書、 臨済宗法灯派の本山である由良興 国寺文書、紀美野町(旧野上町)の 野上八幡宮に所蔵される蒙古襲来 のさ中、憑依した八幡神と法灯国 師との問答を記録した託宣記、同 町小川八幡宮所蔵の天平古写を含 む大般若經の調査報告とそれぞれの 史料についての解説を収めた史料 集である。本書の刊行にあたって の史料調査を行うとともに、託宣 記の翻刻と概要の紹介と成立につ いて考察した解説を執筆した。	藪田香融・ 原田正俊	384頁
杭全神社宝物撰(なにわ・ 大阪文化遺産学叢書18)	共編 著	2010年3 月	関西大学なに わ・大阪文化 遺産学研究セ ンター	本書は、2008年から2009年に 関西大学なにわ・大阪文化遺産学 研究センターが行った大阪市平野 区の杭全神社総合調査の成果をも とにした宝物図録である。杭全神 社は、平安時代前期に創建された との由緒をもつ神社で、多くの 什・宝物類を所蔵する。本書には、 什・宝物類のほか、神事や境内の 石造物や古木を含めた65点の図 版、総論、図版解説が収録されて いる。収録された什・宝物類の うち、「熊野の本地絵草子」・「 平野郷社之図」・「永正十年 熊野三所権現玉殿建立棟札」・ 「永正十年熊野証誠大権現宝殿 造立棟札」・「寛永二年熊野三 所権現玉殿修造棟札」・「正徳 元年牛頭天王祠落成棟札」・「 後西院宸筆般若心經」・「妙法 蓮華經」・「熊野三所権現神号 扁額」・「牛頭天王神号扁額」・ 「末吉藤右衛門寄進石灯籠」・ 「本多忠良寄進石灯籠」につ いての解説を執筆した。	影山陽子・ 中尾和昇・ 松永友和	101頁

山田伸吉の生涯と画業（大阪都市遺産研究叢書別集9）	共編著	2015年3月	関西大学大阪都市遺産研究センター	本書は、松竹宣伝部に所属し、大正から昭和初期のモダンな時代に、舞台背景画のデザインなどの舞台意匠を手がけて活躍し、晩年には歌舞伎の名場面を油彩画で表現する「芝居画」という新たなジャンルを生み出した山田伸吉の作品について、関西大学大阪都市遺産研究センターが収集し、調査・研究を進めた成果をまとめるとともに、2014年に遺族から寄贈を受けた新出の作品類を紹介したものである。本書の編集を行うとともに、1932年と1975年に発行された雑誌に収められた座談会の分析を通して、山田伸吉が活躍した大正から戦後までの道頓堀の移り変わりについて考察した論考「山田伸吉と道頓堀」を執筆した。	長谷洋一	91頁
(学術論文) 最澄撰「三部長講会式」にみえる御霊	単著	2002年7月	『史泉』第96号、関西大学史学・地理学会【査読有】	「三部長講会式」とは、比叡山で行われる護国三部経の長講会の次第を記したもので、大同・弘仁年間に最澄が撰述したものとされる。その成立をめぐっては従来から真偽が論争されていたが、本稿において、その内容から最澄が大同・弘仁年間に撰述したものであることを証明した。「三部長講会式」の神分の部分には、歴代天皇を始め皇族や貴族らの名前があり、長講会において追善の対象となっていたことがわかる。その人物の中に、貞観五年神泉苑御霊会の六座の御霊のうち、崇道天皇・伊予親王・藤原吉子・藤原仲成がみえることを指摘し、貞観五年の神泉苑御霊会の半世紀前に、最澄によって、のちに「御霊」とされる人々の慰撫が行われていたことを明らかにした。		p. 37-53
伊予親王事件の背景－親王の子女と文学を手がかりに－	単著	2004年3月	『古代文化』第56巻第3号、財団法人古代学協会【査読有】	空海の漢詩文集である『性霊集』巻四に収められている「為藤真川挙浄豊啓」は、伊予親王事件によって排斥されていた親王の文学であった藤原真川の登用を請願するための空海による上啓文である。その内容の分析から、伊予親王事件の背景は、平城天皇派と神野親王・伊予親王派の対立に、藤原薬子・仲成の策謀が加わった皇位継承争いであったことを指摘し、あわせて、空海の外舅で伊予親王の文学であった阿刀大足や六国史にある親王の子女についての記事の分析を通して、空海と桓武天皇・神野親王・伊予親王らとの交流について考察した。		p. 1-14
嵯峨・淳和朝の「御霊」慰撫－『性霊集』伊予親王追善願文を中心に－	単著	2005年1月	『佛教史学研究』第47巻第2号、佛教史学会【査読有】	『性霊集』巻六には、年未詳のものと天長元年に行われた伊予親王の追善法会の際の願文が収められている。本稿では、年未詳のものが、伊予親王と藤原吉子が本位に復された弘仁十年の可能性が高いことを指摘した。また、空海の伝記にある乙訓寺別当の就任は、空海が乙訓寺に幽閉された早良親王（崇道天皇）の慰撫のためであることを考察し、最澄とともに空海も嵯峨・淳和朝において貞観五年神泉苑御霊会で「御霊」とされた崇道天皇・伊予親王・藤原吉子の慰撫にあたっていることを明らかにした。さらに、御霊への慰撫の契機が神泉苑御霊会では疫病流行であったのに対し、嵯峨・淳和朝では天皇不予と祈雨（旱害）にあるとした。		p. 1-19

<p>「平田寺勅書」と御霊信仰 —天平感宝元年閏五月二十 日勅をめぐって—</p>	<p>単著</p>	<p>2005年12 月</p>	<p>『古代史の研究』第12号、 関西大学古代 史研究会【査 読無】</p>	<p>「華嚴経為本」の詔として南都六宗の 成立において注目されている『続日本 紀』天平勝宝元年閏五月癸丑条の詔の 原文が静岡県平田寺に所蔵され、「平 田寺勅書」として知られている。「平 田寺勅書」からは、「華嚴経為本」の 詔の全文が判明するが、その宣誓部 には、この勅に違犯した者に「七廟尊 霊」や「佐命立功大臣將軍之霊」な どが大禍を起こすと記されている。こ うした思想は、のちの御霊信仰の成 立に影響するものであり、その萌芽 を示す内容であると考察した。</p>	<p>p. 66 -82</p>
<p>空海の得度・受戒年次をめぐ って—三十一歳説の再検 討—</p>	<p>単著</p>	<p>2007年4 月</p>	<p>『續日本紀研 究』第367号、 續日本紀研 究会【査読有】</p>	<p>空海の得度をめぐっては、『続日本後 紀』承和二年三月庚午条の「空海卒 伝」を根拠として三十一歳説が通説と なっているが、平安時代中期ごろに編 纂された空海の伝記には、二十歳で得 度し、二十二歳で受戒したことが記さ れ、受戒の際の戒牒である「大師御戒 牒文」が掲載されたものもある。本稿 では、平安時代～江戸時代に編纂され た空海の伝記にみえる得度・受戒年次 を整理するとともに、「大師御戒牒 文」にみえる三師七証となった人物な どの分析を通して、空海は、二十歳で 得度し、二十二歳で受戒したと結論づ けた。</p>	<p>p. 1- 17</p>
<p>平安時代初期の得度・受戒 制度—空海の「出家入唐」 をめぐる二種の太政官符を 中心に—</p>	<p>単著</p>	<p>2008年1 月</p>	<p>『ヒストリ ア』第208号、 大阪歴史学会 【査読有】</p>	<p>『続日本後紀』の「空海卒伝」ととも に、空海の三十一歳得度説の根拠とし て度縁とみなされている延暦二十四 年九月十一日付け太政官符と空海の課 役免除を命じた大同三年六月十九日 付け太政官符について、平安時代初 期の得度・受戒制度から分析した。当 時の制度では、政府で保管され、本 貫地などが記載された身分証明書とな る度縁は、受戒後には廃棄された。延 暦二十四年官符は、遣唐留学僧の空 海が、唐での活動や帰国にあたって 発給された公験であり、その後、この 官符が、政府に保管され、空海得度 に対する政府による公式見解となり、 大同三年官符や「空海卒伝」の記述 につながったとした。</p>	<p>p. 27 -50</p>
<p>木崎愛吉旧蔵「征西大將軍 式部卿親王墓碑」拓本につ いて</p>	<p>単著</p>	<p>2011年6 月</p>	<p>『大阪都市遺 産研究』第1 号、関西大学 大阪都市遺 産研究センター 【査読無】</p>	<p>関西大学博物館所蔵の木崎愛吉旧蔵 本山コレクション金石文拓本のうち 「征西大將軍式部卿親王墓碑」拓本 について、熊本県八代市に所在する 後醍醐天皇の皇子で征西大將軍式部 卿親王である懐良親王墓の現地調査 を行い、この拓本が、現在は磨滅に よって文字の判読ができない状態 であるが、親王墓に立てられた石柱 のものである可能性を指摘した。ま た、明治初年に親王墓が選定される 経緯を考察し、拓本に富岡鉄斎の 識字があることから、芸術家として 知られる富岡鉄斎が明治初年には 神官として南朝ゆかりの地の顕彰に 携わっていることから、墓碑の建 立やこの拓本の背景には、当時の 南朝史観があることを考察した。</p>	<p>p. 53 -60</p>

入唐前の空海をめぐる一 『御遺告廿五箇条』第十六 条を中心に一	単著	2013年3 月	『古代史の研究』第18号、 関西大学古代 史研究会【査 読無】	入唐前の空海について、二十歳得度・ 二十二歳受戒説の立場から、それ以後 の足跡を『御遺告廿五箇条』第十六条 の分析を通じて考察した。本条は、真 言宗年分度者の修学規定を指示したも のであり、受戒後三年間、高野山で練 行し、その後、師に随って密教を受学 することを定めている。最澄の「山家 学生式」には、天台宗年分度者に十二 年間の比叡山での籠山を定めるが、こ れは最澄自身の体験にもとづくことと され、本条の規定も空海自身の体験に よると考えられる。空海は二十四歳で 『聾瞽指帰』を著しているが、これは 受戒後、足かけ三年後のことであり、 本条の規定と一致する。密教の受学は 三年間の籠山後のことと定めることか らすると、三年間の籠山は顕教の修業 期間とみなされ、『聾瞽指帰』は、空 海の「顕教修学の集大成の書」と位置 づけるべきであり、『御遺告廿五箇 条』には、空海の遺命が反映されており、今後、逐条的に検討する必要がある		p. 42 -57
(学会発表) 最澄「三部長講会式」にみ える御霊		2001年12 月	関西大学史学・ 地理学会2001年 度大会(於：関 西大学)	最澄が比叡山で護国三部経の長講を行 う際の次第をまとめた「三部長講会 式」には、歴代天皇や皇族、貴族らと ともに神泉苑御霊会で「御霊」とされ た人物も慰撫の対象として記されてい る。本報告では、最澄の撰述について 議論のある「三部長講会式」を最澄の 真撰であると位置づけ、神泉苑御霊会 の約五十年前に、最澄によって「御 霊」の慰撫が行われていたことを指摘 し、従来の御霊信仰や神泉苑御霊会 の研究について再考する上で、この史料 がきわめて重要であるとした。		
空海の仏事法会と「御霊」		2003年11 月	佛教史學會第 54回学術大会 (於：関西大 学)	『性霊集』巻六・巻七・巻八には、空 海が関わった仏事法会の際に作成され た願文が収められている。本報告で は、『性霊集』に収められた願文から 法会の施主や開催した場所・日時など を一覧表とし、空海が関わった仏事法 会について概観した。また、願文のう ち、伊予親王とその母藤原吉子の二編 の追善願文に焦点を当て、その内容の 分析や法会開催の背景などを検討し、 これまで貞観五年神泉苑御霊会を起点 に研究が進められてきた御霊信仰につ いて、最澄とともに空海の活動も注目 すべきであると指摘した。		
平安時代初期の得度・受戒 制度一空海伝所収の太政官 符を中心に一		2007年6 月	大阪歴史学会 2007年度大会 古代史部会報 告(於：大阪 市立大学)	空海の得度・受戒年次をめぐるは、 現在では『続日本後紀』にある三十一 歳説が通説であるが、空海の伝記や 「大師御戒牒文」の分析によって二十 歳得度・二十二歳受戒とする立場か ら、『続日本後紀』とともに三十一歳 説の根拠となっている大和文華館所蔵 の延暦二十四年九月十一日付け太政官 符と『高野大師御広伝』などに所収さ れる大同三年六月十九日付け太政官符 について平安時代初期の得度・受戒制 度から分析し、二種の太政官符に記載 された出家年次が、空海の得度年次を 示すものではないと結論した。		
(その他)						

【調査報告】 関西大学博物館所蔵本山コレクション「日本の部」拓本目録	単著	2006年3月	『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2005』、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター	関西大学博物館所蔵の木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本の予備調査として行った軸装分の拓本について、古代から近代の金石文126点の目録である。それぞれの拓本について「外題」「頁数」「装幀」「法量」「銘文の性格」などのほか、木崎編『大日本金石史』の採用の有無（採用分は巻数と頁数）、「備考」として朱印のあるものについては印文・木崎の書き込みを記している。あわせて、本山コレクションとコレクターの本山彦一、木崎愛吉の金石文研究、木崎旧蔵の拓本が本山コレクションに入った経緯について考察した解説を付した。		p. 7-39
【報告】 仏教史学入門講座第1回 いま仏教史が面白い！?	単著	2007年2月	『佛教史学研究』第49巻第2号、佛教史学会	佛教史学会の初の試みであった入門講座は、これから仏教史を学ぼうとする学部学生や大学院生を対象として開催された。第1回目の入門講座では、平雅行氏により「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したか」・佐藤直美氏により「仏教の歴史を学ぶとは—インドから日本、そして未来へ—」という講演が行われたが、その記録を学会誌の『佛教史学研究』に掲載することとなり、入門講座の担当委員として企画から当日の運営に携わったため、開催の目的や経緯、当日の内容、今後の課題などを執筆した。		p. 89-91
【講演】 古代門真の治水事業～古代の茨田郡を考える～		2008年12月	門真市立歴史資料館歴史講座（於：門真市立歴史博物館）	『古事記』『日本書紀』に記される茨田堤築造の記事をはじめとして、日本古代の文献史料にみえる茨田堤関連の記事をたどるとともに、中世初期の茨田郡のあり様を紹介し、現在の大阪府門真市域にあたる茨田郡の古代における歴史的な位置づけについて講演した。		
【副読本】 吹田の文化遺産—千里山団地の記録—	共同制作	2010年4月	関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター	大阪府吹田市の千里山団地は、戦後日本の集合住宅の先駆けである。建設にあたっては、ダイニングキッチンや洋式トイレの導入などの新たな住環境の試みがなされ、その後の日本人の生活スタイルを大きく変貌させる契機となった。2010年3月の全面建替を前に千里山団地をくらしの文化遺産ととらえ、建設から現在までのあゆみなどを地域学習のためのDVDによる動画映像による副読本として制作した。	黒田一充・橋寺知子・藤岡真衣・常行貞臣・速水裕子	DVD
【講演】 行基と古代の門真		2010年12月	門真市立歴史資料館連続講座（於：門真市立歴史博物館）	現在の大阪府門真市域にあたる河内国茨田郡での行基の活動を『行基年譜』などの史料の分析によって考察し、茨田郡における彼の活動の歴史的意義と、古代の門真周辺の宗教世界について講演した。		
【副読本】 副読本 吹田の文化遺産	共同制作	2011年3月	関西大学大阪都市遺産研究センター	吹田市内の小・中学生用の地域学習の副読本。映像編DVDと史料編CDからなる。吹田市内の小・中学生用の地域学習の副読本を吹田市立小学校教員の助言を得て、独立行政法人日本万国博覧会記念機構などの協力のもと共同で制作した。吹田の歴史を動画映像によって解説する映像編DVDと吹田市内の有形・無形の文化財を動画映像や写真とともに解説した史料編CDからなる。	黒田一充・橋寺知子・藤井裕之・高橋隆博・大谷渡・藤岡真衣・常行貞臣・速水裕子	DVD・CD-R

〔シンポジウム〕最澄をめぐる諸問題－平安仏教史研究の新視角－	コーディネーター	2011年4月	佛教史學會特別例会（於：大谷大学）	伝教大師最澄に関して平安仏教の成立をめぐる問題について、藺田香融関西大学名誉教授・佐藤文子氏の講演のうち、吉田一彦名古屋市立大学教授を加えたパネルディスカッションにおいてコーディネーターを務めた。		
〔講演〕吹田の文化遺産－歴史を中心に－			2011年度関西大学ミュージアム講座「なにわの文化遺産（6）」（於：関西大学）	大阪府の北部に位置する吹田市の古代から近現代に至るあゆみをたどりながら、大都市大阪の近郊都市として、また京都との中間に位置する立地から、吹田市が歴史的に担ってきた役割について講演した。		
〔シンポジウム〕住吉大社と豊臣期大坂図屏風－都市の祭礼と信仰をさぐる－	コーディネーター	2012年7月	関西大学大阪都市遺産研究センター地域連携シンポジウム（於：住吉大社）	オーストリアのエッゲンベルク城に所蔵される「豊臣期大坂図屏風」に描かれた住吉大社の夏祭りの様子を手がかりに、住吉大社の歴史・建築・祭礼について、小出英詞住吉大社権禰宜・永井規男関西大学名誉教授・黒田一充関西大学教授の講演のうち、高橋隆博関西大学教授を加えたパネルディスカッションにおいてコーディネーターを務めた。		
〔講演〕大阪万博と門真		2013年6月	歴史資料館特別展連続講座（於：門真市立歴史資料館）	門真市立歴史資料館の特別展「市制施行50周年プレイバック・かどま～收藏品にみるあのとき、このとき～」の一環として開催された連続講座で、万国博覧会の歴史や大阪万博について当時の映像資料などをまじえて、高度経済成長期における門真について講演した。		
〔シンポジウム〕芝居町道頓堀の景観復元を目指して	コーディネーター	2013年6月	関西大学大阪都市遺産研究センター第5回大阪都市遺産フォーラム（於：関西大学）	関西大学大阪都市遺産研究センターが進めるCGによる明治末期から大正初年の芝居町道頓堀の景観復元プロジェクトにおいて、その成果の中間公開として開催されたフォーラムのパネルディスカッションにおいてコーディネーターを務めた。		
〔講演〕古代の茨田堤について～水都大阪の源流～		2013年8月	茨田堤祭歴史講演会（於：堤根神社）	伝茨田堤に位置し、堤の神を祀る大阪府門真市の堤根神社が毎年開催する茨田堤祭での第2回目の歴史講演会として、5世紀の茨田堤の築造が、大型前方後円墳に代表される倭王権の伸長を示すものであり、現在の水都大阪の源流となる事業であったことを指摘した。		
〔講演〕弓削道鏡～最近の研究成果から～		2013年10月	資料館歴史講座「人物でみる八尾の歴史」第1回（於：八尾市立歴史民俗資料館）	現在の八尾市域の出身とされる奈良時代の僧道鏡について、最近の奈良時代の仏教史研究の成果をふまえて、皇位篡奪をねらった怪僧としてとらえられてきたイメージを見直し、道鏡の仏教史的な位置づけについて講演した。		
〔講演〕『銀二貫』からさぐる大阪の食文化		2014年3月	八尾市立山本図書館平成25年度文学講座（於：八尾市山本コミュニティセンター）	第1回「Osaka Book One Project」を受賞した高田郁氏の時代小説『銀二貫』に描かれている近世大坂の食にまつわるさまざまなエピソードを取り上げながら、大阪の食文化について講演した。		

〔展覧会図録〕再現！道頓堀の芝居小屋～道頓堀開削399年～	共編著	2014年4月	関西大学大阪都市遺産研究センター	本書は、2014年4月19日から5月25日に大阪くらしの今昔館で、同館と関西大学大阪都市遺産研究センターとの共催で開催された展覧会の図録である。本書の編集を行うとともに、「芝居町道頓堀のあゆみ」・「道頓堀五座の時代」・「中村儀右衛門」・「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」の項目を執筆した。	長谷洋一・橋寺知子・児玉竜一	
〔学会展望〕2013年の歴史学界－回顧と展望－日本古代 七（奈良・平安時代の宗教）	単著	2014年5月	『史學雑誌』第123編第5号、史學會	『史學雑誌』恒例の前年の歴史学界の動向を紹介する「回顧と展望」において、奈良・平安時代の宗教に関する成果についての項目執筆を担当し、仏教・神祇・信仰それぞれの1年間の研究成果を紹介し、批評を加えた。		p. 59 -62
〔講演〕文献からひも解く伝茨田堤～地域ではぐくむ「歴史遺産」～		2015年3月	第2回門真市生涯学習フォーラム（於：大阪国際大学守口キャンパス）	『古事記』『日本書紀』に記される茨田堤築造の記事を分析し、その築造の歴史的意義について考察するとともに、地域の歴史遺産としての茨田堤の遺構を今後どのように地域として保存し活用していくのかについて提言した。		
〔報告〕芝居町を展示する	単著	2015年3月	『阡陵』No. 70、関西大学博物館	関西大学大阪都市遺産研究センターが、2014年4月から5月に大阪くらしの今昔館で開催した展覧会と、2014年12月18日から2015年2月4日に早稲田大学演劇博物館で開催した展覧会「芝居町道頓堀の風景」について紹介するとともに、大学の研究成果発信の手法としての「展示」の可能性について述べた。		p. 14 -15

※著書，学術論文，その他の別で列記してください。枠内の( )の位置は分量に応じて変更してください。